



深野池の 生い立ち④



室町時代末期、キリスト教布教のため来日していた、ポルトガル人宣教師フロイスが著した『日本史』という書物があります。その中に三箇キリシタンのことを記した次のようなくだりがあります。「飯盛城の麓には、長さ4〜5里の大きな淡水湖があり、そこにはおびただしい丸木舟、その他の小船がある」「司祭はそこから三ヶ殿という一貴人の領地へ呼ばれて行った。この地は飯盛城に向きあつて、ある湖の真中にあり、そこへ大勢の（おびただしい）が集まつてきて、大

部分の人がキリシタンとなつた」。三ヶ殿とはキリスト教に改宗した三箇サンチヨ（頼照（たのてる）のことです。そして、深野池という名称こそ出てきませんが、この湖こそ後の深野池のことを指していると思われ

また、このころの飯盛城の城主は三好長慶ですが、城中で行われた連歌（れんが）の会で、長慶が「ふる沼の浅きかたより野となりて」と吟じ、諸人の賛辞（さんじ）を受けたといひます。このふる沼も、後の深野池のことでしょうか。



深野池の 生い立ち⑤



現在、柏原から堺へ流れている大和川、しかし、この川が江戸時代に新しく造られたものであることをご存知でしょうか。それまでの大和川は柏原から北に向かい、その後幾筋もの流れに分かれ河内平野を北上し、その支流の一つである吉田川が深野池に注いでいました。川は長雨が続くと各所で堤防が決壊し、川筋の農民たちは度々、洪水の被害を受けていました。

大和川付け替えは、農民たちの長年の切なる願いでしたが、宝永元（1704）年に、ついに付け替えられたのです。今からちょうど300年前のことでした。それによつて元の川筋は新田に生まれ変わり、深野池も翌年の宝永2（1705）年から干拓が始まり、新田となりました。その姿はもう見ることは出来ませんが、付け替え前の元祿2（1689）年、当地を

旅した貝原益軒が『南游紀行』に、「池の広さは南北2里、東西1里で湖のようで、そこには島があり三箇という村がある。島には漁で暮らす家が七、八十戸あり、田畑もある。池にはコイ、フナ、ナマズ、ハスなど魚が多く、毎日魚を捕つて大坂へ売りに行く。また、蓮やみずぶき、葦が多く生え、それを採つて生活に用いている。特に菱が多く、その実を採つて、飯や団子や粥にして食べ、また、売つたりもした。菱を採る日は決まつており、菱には税がかからなかつた」とその様子を記しています。

現在の大東市の姿が出来上がるのは深野池の干拓後からと言えます。近年は開発が進み、昔ながらの田園風景が失われつつありますが、少し気を付けて歩けば、干拓後に作られた井路や水量を調節するために設置した、樋門などを目にする事が出来ます。